

WUOC2018 スタッフ報告書

現地帯同スタッフ 杉村 俊輔

1. はじめに

今回、世界大学オリエンテーリング選手権(以下、WUOC)の現地帯同スタッフを務めました、東北大学OB4年目の杉村俊輔と申します。今年のWUOCは、フィンランドのクオルタネという町で7月17日～21日の日程で開催されました。

私が現地帯同スタッフを務めようと考えた大きな理由は、ジュニア世界選手権(JWOC)に2回出場させていただいたことへの恩返しや経験の還元を言葉ではなく行動で示したかったから、そしてインカレミドル2013で優勝しWUOC2014への参加資格を得ていたのにも関わらず、怪我や学業を理由に辞退してしまっていたことへの後悔があったからです。ちょうどイタリアに在学中だったということも少しは背中を押してくれました。もし他に名乗り出る方がいなければ現地帯同を務めても構わない、と技術委員長の大西さんにお伝えしたところ、名乗り出る方がいらっしやらなかったのも、スタッフを務めることとなりました。

スタッフとしては初めての国際大会への参加となりましたが、非常に良い経験をさせていただきました。現地帯同してみて感じたことや反省点を以下に示したいと思います。

2. 活動内容

私が主に担当しましたのは、トレーニングキャンプ(以下、トレキャン)や交通などの運営者とのやり取り、現地での選手のサポートやリレーの選考などといった活動でした。

運営者とのやり取り、トレキャン関係

運営者とのメールのやり取りは、大会の2か月前から始めました。日本チームは大会1週間前からトレキャンをやることになったので、トレキャン計画を作成したうえでトレインや移動方法、宿泊についての要望をお伝えしました。今回はトレキャンで2種類のフォレストトレインしか用意されておらず、しかもスプリントの練習機会は提供できないと言われたので、基本的にはこの2種類でやりくりしました。

坂梨を除く11人の選手は7月9日に到着し、7月10日からトレーニングを始めました。坂梨と私は7月13日の到着だったので最初は選手だけで動いてもらいましたが、その間特に問題はなく、トレインへの移動や宿泊関係はほぼ要望通りとなってくれました。現地に着いてからは、運営者とのやり取りをある程度スムーズに進めることができたので、競技以外の部分で困ることが特になかったのは大きかったです。

ただ、実際に現地に行ってみたら宿舎周辺のスプリント用の地図がありました。何度もメールで確認して提供できないとずっと言われ続けていたのでかなり驚きましたが、結果的

にスプリントの練習機会を設けることができたので良かったと思います。過去の WUOC 代表選手やスタッフの報告書を見ても、現地に行ってみないと分からないことがあるのはそんなに不思議なことではないようですので、現地での柔軟な対応も求められると感じました。

現地での活動

まず、今回の代表選手のほとんどが初めて会う選手だったので、選手とのコミュニケーションを積極的に取ることを大事にしました。幸いにも、到着したその日にはほとんど全員と話ができ、すぐに馴染むことができました。選手に安心してもらう意味でも本当に良かったと思っています。

トレキャン期間中は、私自身競技を離れてのブランクが大きいこともあり、ランオブ等の競技的指導はあまりできませんでしたが、拠点に戻ってきた選手にトレインの感触やオリエンテーリングの調子などを聞き、助言できることについては伝えてあげました。選手たちは高い意識をもってトレーニングに励んでいたと思います。

本戦期間中は、まずスタート地区に向かい、選手のスタートを見送り、全員出走後ゴール地区に戻り、全員ゴールしダウンなど終わったら宿舎に戻り、テクニカルミーティングに出席し、日本チームでミーティングを行う、という 1 日の流れでした。また、宿舎－大会本部間を 1 日に何往復かして、各種目のエントリー表の提出や配布物の受け取りといったことをしました。その他にも細かい仕事がありました。とにかく何をやるにしても、時間に対して神経質になる必要があると感じていました。

今回は JWOC や WOC など海外経験をしている選手が多く、また海外経験していない選手もレースに対して集中できている印象があったので、特にレース前はあまり余計なことは口出しせず、各々のルーティンを大事にしてレースに臨んでもらうようにしたつもりです。レース後や宿舎に戻ってからは、少し気落ちしているように見えた選手には個人的に声をかけ、話を聞いてあげつつ連戦なので気持ちを切り替えることを促していきました。

最終日のリレーの選考については、女子はなるべく決めたいという要望がありました。各選手と個人面談を行い、希望走順や適正、最近の調子、トレキャンでのトレインへの適応などを考慮してメンバーを決定しました。男子は、トレキャン期間中に参考レースを 1 本行い、その結果と本戦のミドルとロングの結果を総合的に判断して決定しました。

3. 現地帯同をしてみたの感想や反省点

トレキャン、本戦を振り返って

今回は、早い時期からこの WUOC を目指し、そしてただ出場するだけでなく結果を求めて取り組んできた選手が多かったと思います。非常に高いモチベーションを持って練習や準備に取り組んでおり、大変感心しました。例えば本戦のスプリントトレインについては、

基盤地図や Google のストリートビューや航空写真等を用いて、現地の風景を確認したり対策用の地図を作成して予想コースを組んだりと質の高い対策ができていたと思います。その他の競技でもスタート地区の場所はほぼ完璧に当てていましたし、本番前にできることはやれていたのでは、と思います。

結果について見てみますと、まずスプリントリレーでは 3 回目にして初めて結果を残すことができました。終盤まで他国との競り合いの中でレースを進められましたし、フィジカル重視のコースの中でよく健闘したと思います。ミドルはやや苦戦したかなという印象です。今年は現地の人も驚くぐらいの猛暑で、高負荷なナビゲーションに加え暑さというストレスが加わり、中盤から終盤にかけて集中力が持たなかった選手が多かったように思います。スプリントはこちらも難易度が抑えられたフィジカル重視のコースとなりました。他国の選手との競り合いの中で主導権を握れた選手もいましたし、全体としてはまずまずの結果だったと思います。ロングは男子 12.4 km、女子 9.7 km という非常にタフなコースでしたが、全員完走することができました。最後までよく粘ってくれたと思います。南河、増澤はかなり良いレースをしてくれましたし、特に南河はロングの歴代最高順位を更新する素晴らしい走りでした。リレーは男女ともに 1 走で離れてしまう苦しい展開となってしまいました。その中でも、上島はスプリントに引き続き良いレースをしてくれました。チームとして力がまだまだ足りないというのがありますが、走順も含め力を十分に発揮できなかったとすれば、メンバーを選んだ私としては選手たちに申し訳なかったと感じています。

基礎技術の取得について

海外選手との差を考えたとき、やはりフィジカルの差はまだあると感じました。ただ今回、選手たちの口からも出たように、海外選手との差で最も大きかったのは「基礎技術」であると感じています。一瞬でも手続きをさぼると現在地を失うのが容易なフィンランドのトレインだからこそ浮き彫りになったのかなとも思っています。

そもそも「基礎技術」とは何か。地図読み、地図のハンドリング、整置、地図と現地の対応、コンパス直進、ルートプランニング、整地&不整地を速く走ること……これ以外にもまだまだあると思います。これらについては反復練習する以外に身につくことはないと思っています。日本でやってできないことが海外でもできるはずがないというのは、私が JWOC に出場した際に強く感じたことです。これから世界の舞台を目指したい選手も含め、まずは各技術の項目について何がどこまでできるかをよく分析し、今後の強化や練習の改善につなげてほしいと思います。

もちろん、技術取得のための練習方法を提供する機会も必要になります。そういう場を提供する意味でも学連合宿の体制を整えていく必要があるとも感じました。これに関してはすぐにどうこうなるかは分かりませんが、これまで私も力になれていなかったので申し訳ない気持ちもあります。今後必要であれば協力していきたいと考えています。

スタッフ活動における反省

まず一番に反省していることですが、ロング競技ではディスクリプションが地図に表記されないのにも関わらず何人かの選手はディスクリプションホルダーを装着しないまま出走してしまいました。結果的には全員完走することができましたが、一步間違えればDISQになるような状況でした。経緯をお伝えしておきますと、本戦期間が始まる前のミーティングでは、Bulletin 4 にロング競技で地図にディスクリプションがないことが記載されていることを確認しましたが、最も大事な前日のミーティングではテクニカルミーティング資料に沿って話を進めた結果、そのことを伝えるのを怠ってしまいました。さらに資料中のディスクリプションに関する項目に記載されていた”only loose descriptions”の表記を理解できず、曖昧にしたまま本番を迎えてしまいました(配布用のディスクリプションのみ、という意味になります)。この件に関する責任は私にありますし、何より選手には大変申し訳なかったと感じています。また、このような困難な状況の中完走してくれた選手を称えたいと思っています。

初めてのスタッフ活動で戸惑うこともありましたが、そういうときに戸惑いとか少し疲れている様子を選手に見せてしまったのも大きな反省点です。選手に安心して、そして集中して競技に臨んでもらいたいことを考えればよくなかったと思っています。この他にも細かい反省点はありますが、大きな反省点は以上の2つになります。

今後の現地帯同スタッフについて

現地帯同は2人以上いた方が良いというのが、1人で務めてみての率直な感想です。もちろん、私が力不足だったというのものもあるかもしれませんが、ただ、競技に関する重要なことの見落としを防ぐことや、仕事の負担を軽減することで選手のサポートにより集中できるという意味でも、2人以上いると良いのではというのを感じました。

ただ、どのようにスタッフを集めるかは、毎年非常に難しい問題になっていると思います。あくまで個人的な意見として述べさせていただきますが、もし豊富な英語力・競技知識があるのであれば、代表選手の選考に落ちたものの海外でオリエンテーリングをしたいという大学生や大学院生が現地帯同スタッフを務めるのも悪くないのではと思っています。トレキャンや大会期間中のOpen Raceなどでオリエンテーリングできますし、他大の選手の準備や取り組みの様子を間近で見ることができます。海外の選手と並走し直接何かを得るといった経験はできないですが、彼らの試合前のルーティンや試合での走りを外から見られるだけで十分刺激を得られると思います。海外の大会あるいは世界大会がどのように運営され成り立っているのかも勉強できますし、非常にいい経験になると思います。国際大会の経験がないという方は不安に思うかもしれませんが、もしやりたいという方がいれば、仕事内容やノウハウの伝達はしていきたいと考えています。ただ、生半可な気持ちでは決して務まらない仕事であるということは頭に入れておいてほしいです。

4. 最後に

上述の通り、初めてのスタッフ活動でありかつ初めて会う選手が多かったため私も不安の中で臨んだ WUOC でしたが、10 日間非常に充実した日々を送ることができました。選手たちは本戦までの準備から本番でのレース、そして最後のバンケットまで本当によく頑張ってくれました。何より、選手の皆さんから遠征が楽しかったという声が聞けて、スタッフ冥利に尽きる思いです。本当にありがとうございました。

そして、セレクション運営から選手の選考、そしてエントリー関係など一番大変なところをやっていただきました大西さんには深く感謝しております。現地帯同するうえで分からないことについても教えてくださり、現地での活動に役立てていくことができました。また、セレクションや壮行会、合宿などご尽力いただきました JOA 関係者の皆様、日本から選手に熱い声援を送ってくださった皆様にこの場をお借りして感謝を申し上げます。

2 年後の WUOC はロシアの Smolensk で行われます。ぜひ多くの選手に WUOC を目指してほしいと考えています。今回の代表選手の多くが次回も参加資格を満たしています。これからの代表選手の活躍を期待していますし、彼ら彼女らに挑む選手たちも応援していきたいと思えます。